

印 癖 考

岡 村 浩

一、はじめに

坂口安吾（一九〇六—一九五五）が生まれて丁度一〇〇年を迎える。その業績は精力的、学際的に、かつ一般に浸透することを目的とし、多方面より分析が行われつつある。「世俗の権威にとらわれずに本質を提示し、反骨と飽くなき挑戦者魂をもった作家、坂口安吾。生誕百年を迎える今も根強い人気を得ている。本会は、坂口安吾の業績を顕彰し、普及・啓発するため『坂口安吾生誕百年記念事業』を開催し、地域文化の振興に寄与することを目的とする。」とは、新潟市・新潟市芸術文化振興財団が要となること誕生した「坂口安吾生誕百年祭実行委員会」会則第二条である。この傘下に独立採算制を基本とする諸々の企画が準備され、中でも十月十五日に予定される「安吾賞」受賞式は、活動のハイライトと位置付けられる。

だが、いかなればこの安吾の偉大さは父、坂口仁一郎（号・五峰 一八五九—一九二三）あつてのことで、「五峰があつてこそ安吾が生まれた」とみるのも重要な視座である。安吾に敬意を表しつつ、この際大いに主張したい点である。五峰の人物の内容を概説すれば、

- ① 阿賀浦村（旧新津市）にあつた素封家としての育ちのよき
- ② 中央で憲政会要職にあつた、衆議院議員として国政に参加した政治家
- ③ 「新潟新聞」主宰者として言論文化を普及・牽引したジャーナリスト
- ④ 本県ゆかりの文人資料『北越詩話』に結晶した漢詩・書をよくした文人肌

等、幅広い事績を残している。そこで、上記の多彩な面のうち、主に文人としての足跡に照射し、詩作や書を中心に関連資料をも含めた「坂口安吾生誕百年記念事業 阪口五峰展」を本貫の新津地区にて開催する準備を行い、会期を平成十八年十月二十日から二十二日とした。

二、五峰の才華

この五峰のことを詳細に伝えるのが本人の七周忌の昭和四年、長子猷吉が刊行した『五峰遺影』に指を折る。本書によれば、明治十二年に単身新潟へ出て古町の池上旅館に泊り、十四年に上大川前通鍛冶小路角・伊狩屋文兵衛の借家へ妻子を呼びよせ一家を構え、のち寄居の知事公舎前の日野屋借家や、中大畑・行形亭前の吉田別邸を経、明治十八年に西大畑神社傍に移り、晩年までそこで過ごした。「坂口安吾生誕碑建立の会」により、この新潟大神宮の境内に安吾記念碑を建てる計画がある。

明治十二年秋、森春濤門下の詩人・加賀在任の山中耕雲が来港、交りをもったのを機に、五峰はそれまで自己流だった詩の流派を春濤を良師として立てるにいたった。二十一歳の時のこと。新潟市寄居在住の山際柳隄・柏崎出身の水落鷗水・佐渡の丸岡南陵・諸橋田龍・馬下永明寺僧の伊藤鏡雨等がごく初期の詩友としてあつた。

新潟に出た五峰は米商会所（新潟米穀株式取引所）の肝煎に就き、四十五年間終世勤め理事長になった。騒々しい空間の畳上に坐り、書の手習いや詩の校閲が将棋の詰手を考える位のことをやりつつ、毎日必ず一定の時間に出社した。その頃、春濤門の佐渡人・小崎藍川と大桃相資が新潟新聞記者としていた。この新聞社は、国内でも最古参の地方新聞として明治十年四月七日に初号を発行、かの尾崎行雄も二年間主筆として活躍、その頃は政党政派に関係する色は薄かったものの、明治十五年七月に箕浦勝人が十ヶ月主筆となるや、この人物が新潟新聞によって改進黨の宣伝を起こし以降、自然と同新聞社は改進黨の機関とみられるようになった。背景とし

て明治十四年に自由党が旗揚げ後、板垣退介の新潟遊説があつて、県下の多くはそちらへなびいていた。立ち遅れを挽回すべく改進黨が巻返しをはかり、同門の詩友がいたせいで、五峰もまた何時の間にか改進黨に左袒、政治家としての片鱗を開花し始めた。

明治十九年、市島春城が主筆となり改革派と目される。保守的な社長・鈴木長蔵と対立しつつも、五峰との同心一体の活動により新潟新聞を掌握するにいたる。春城の招聘によつて東京専門学校を卒業した新発田の上野黙狂を編輯局に、小崎氏を事務枢要に置く。この社に多大なる援助をし続けたのが、中蒲原郡の素封家で、五峰の他に玉井貞太郎・本間新作・畠山嘉三・大倉市十郎諸氏で、主に亀田地区の重立である。私は平成十七年十月に「亀田郷ゆかりの文人展」を企画、右記の人々が書画を愛好した風流韻事の面を持つことを理解している。

なお鈴木長蔵は別に大桃相資等を仲間、「東北日報」と題す別派の新聞を発行し始める。このように当時の新聞とは、イコール政党機関として対抗者を攻撃する色合いを濃くする一方であつた。

明治二十三年七月、衆議院選挙において市島春城は落選する。地盤の亀田郷を他者へ譲り、出身の北蒲原郡より立候補した結果であつたが、これを機に新潟新聞社を辞し上京、以来春城は早稲田の人脈として新たな輝きをみせる。一方新聞社の経営は、盟友五峰に託された。

明治二十四年、三十三歳。注目すべきは、この年にのちの『北越詩話』の淵叢というべき「越人詩話」を紙上に執筆。政党記事の増長する中でも、詩書画に関する寄稿の多彩なのが新潟新聞の特色であつて、つまり社長の嗜好が反映された部分といえよう。

さらに二十六年、三十五歳。再々県会選挙に出馬、この方面でも中蒲原郡を率い所謂「阪口党」として、穩健なる実業家を網羅する一種の政治団体を組織してゆく。山口権三郎・久須美秀三郎・内藤久寛そして市島氏等が少壮期よりの同勢力として挙げられる。

三、五峰詩の光芒と凋落

勝間田稔から千頭・柏田・阿部と新潟県知事の続いた時期、「鷗鷺会」と称す吟社が、政党の首領たる五峰を中心に盛行した。知事はもとより、松野洪洲県裁判所長・青木中洲県警部長・湯原元一視学官・田中書記官等官界の要人が参加したのは特記すべきである。前に触れたが、五峰の師は森春濤。この師に北遊の志があるのを知つた五峰は、書肆・小林二郎（遂齋）が東京に仕入れに出掛けた戻りに、老令の春濤に同行し明治十四年七月、無事到着させた。ちなみに小林二郎とはいち早く良寛の文芸を世間に紹介した『僧良寛歌集』（M12刊）をはじめ、評価すべき出版物を多く手懸けている。この春濤来港時の作詩も直ちに同年十月、『新潟竹枝』と題し出版されている位、小林及び詩人達の動向は手際良い。六十三歳の師を迎えた五峰は二十三歳、この時先述の山際柳隄・小崎藍川・旗野廉堂・旗野桜坪・藤井弥岳等二十代の人々が春濤一過、茉莉園派となり、一派は「新斥調」と呼ばれ「尾州調」と並び称された位賑いを呈した。例えば後日、日下部鳴鶴といった書壇の頂上が来越した折にも、その受け皿となつたのが五峰を中心とした春濤系の詩人達であつたことは、おさえておきたい中央文化受容形態の事実である。

大体茉莉園派の基調は流麗を尊んだため、五峰の詩風も一時豪健長篇大作が影をひそめたといわれるが、鷗鷺会を運営する明治三十年代になると清朝人を学び、唐以前に目を置くようにもなり、大正七年の『北越詩話』脱稿後では東京に日下勺水・国分青厓・館森袖海・田辺碧堂等と穆社を創設するなど交流に展開が生じる。晩年になると、病身のため旧稿改作や補作に多く心血を注ぎ、『五峰遺稿』所収作の歳序に旧作を交換した際の記述が混入しているのは注意すべき点である。

四、春城顕彰の気運

文人たる足跡に止まらず、五峰の事績全般を検してみても大いに関わって

くるのが、すなわち市島春城の存在なのである。この春城については、平成十八年五月十二日から十四日まで阿賀野市水原公民館において、「市島春城展」が挙行されている。春城の生家屋敷一部が奇跡的に往時に近い状態で伝世、これが市へ寄附されたことを記念する特別企画で、筆者も実行委員会顧問として身を一隅に置いた。従来より春城関係資料中、とりわけ興味を有していたのが夥しい数の印章を蒐集した逸事であり、実はこの話題は冒頭言及した阪口五峰にも共通してみられる。

五、一歳下の春城

二人の関係は、五峰が安政六年（一八五九）に生まれた翌年、春城が生まれる。そして五峰は大正十二年（一九二二）六十五歳で病没。一方春城は長く生き、昭和十九年（一九四四）八十五歳で世を去った。実に二十一年、春城の方が長生きをしたのである。

五峰についての特色ある経歴は概説を済ませたが、春城の方は他著に詳しいので省く。ここより論じたいのは、今程述べた如くいくつかの共有する趣味上、ことに篆刻を祖上にする。

六、印癖とは

印章の制度は、中国で成長し、実用の面からと芸術性を重んじる面から今日にいたるまで、例えば契約の際の意志を明らかにするものとして、一方美術制作の面では、自作完成の証として不可欠である。とりわけ後者の場合、雅印自体は小さなものであっても、その刻風・印文・印泥の色・押し方と押す場所、これらは印を用いる作家の器量を如実に語る。

五峰と春城は印の制作者ではなく、自刻印は殆ど残っていないであろう。それよりも名家刻印を蒐集する趣味をもち、しかも名手の印技によるものを競って保有したのであった。多くても数顆あればこと足りるところを、二人共夥しい量を蒐集、このような高尚な趣味を「印癖」と称す。

七、五峰の印癖

五峰蒐集印は、大方散逸せずに伝世しているが、現在のところ私はまだ親しく調査をしていない。しかし近頃、五峰蒐集印を押し並べた細身の双幅軸（本紙138×17cm）を身近に実査する機を得た。そこには、総計一三九顆にのぼる印影が確認出来た。少なくとも、これ位は所有していたのである。次に、五峰蔵印に関する先行文献を引いてみたい。

① 『會津八一と坂口献吉』（長坂吉和著・新潟日報事業社・S54）は、五峰の子息・献吉の徳婦人に取材し八一書簡五十通（S17）S31・不明（五通）の主な内容を紹介しながら、両者の交流を実証したものである。篆刻に関しては、

さて、私をはじめ坂口家を訪れたのは昭和五十一年の初夏であった。それは、かつて坂口献吉氏が秋艸道人に依頼して亡父五峰遺愛の雅印百数十顆を鑑定してもらったことがあった。道人は数日間を費して克明に鑑識したのであって、それを「坂口家印鑑控」として坂口氏へ残したのである。……たまたま古町四の佐久間書店に立ち寄ったところ、主人栄治郎氏から雑誌『いしづみ』第三号に掲載された今川文暁氏の「印人」正平、大愚、画人、靈山の想い出」の一文を紹介された。その一節に「坂口家印鑑控」がふれられてあったのだ。……

と記述している。この「坂口家印鑑控」の存在を調査した、

② 「印人」正平、大愚、画人、靈山の想い出」（今川魚心子記・『いしづみ』第三号所収・新潟拓本研究会刊）

とは、著者の今川氏自身、鉄筆を握った禅僧であった。

なお①にある「道人」とは、會津八一（一八八一～一九五六）を指す。八一も確固たる印学を主唱しつつ他方面の名家に刻印を依頼、第二次大戦の罹災で一度に大量を焼失したが、戦後精力的に蒐集を再開。晩年個展を繰り返す書業を支えた重要な文房具でもあり、今日再蒐集品は會津八一記念館に保存される。

近年、坂口氏を最もよく調べたのは、坂口守二である。その成果は主と

して、

③ 『新津郷土誌』(新津郷土誌料研究会編)に収められる。氏の主著に、
④ 『會津八一と越後の文人』(新津郷土誌料研究会刊・S56)が挙げられる。県立図書館、国立国会図書館、日本近代文学館等において古い新聞記事や雑誌の記載より、県内文学資料をくまなく見出した成果の一端がまとめられたものである。

とくに④第四章には「更生道人と蘇庵」、「展覧会と印論と五峰晩年」の見出しが設けられている。大正十年五月頃、大病で五峰が余命二カ月と告白された折、「更生道人」の号を用いることを考えた。そこに八一から同号を既に山田正平に与えており、新味に乏しいものであるという所懐を漏らされたこと(八一書簡・三月二十三日付)を中心に、そこから印にまつわる逸事を呈している。「更生道人」(石川蘭八刻)「寿農」(更生)「ゲタ印」(石川蘭八・大正十一年四月刻)「蘇庵」(山田正平、石川蘭八刻)が五峰遺印にある。就中、「いま『五峰遺印』中作者のわかるものから、古い年代をあげてみると、主なものでも山田寒山の明治三十四年、濱村蔵六の明治三十九年、永坂石球明治四十二年、梨本寿岳大正四年、山田正平大正四年などがあげられる。この中でもっとも数の多いのは濱村蔵六である。」(P68)と概容を記している。

八、三浦桐陰蔵「滄浪」印

春城と同じ水原の旧族で漢方医・詩人として五峰とも親しかった三浦桐陰(大正四年・一九一五没)がいる。この三浦家歴代の当主もまた、すこぶる名印を愛蔵する趣味を有し、桐陰追悼録『父祖の面影』(S18刊)巻末には、氏の代までに蓄えた蔵印三十八顆の印影が付されている。桐陰の生前、五峰とはことに詩を通じて交りがあったが、春城を加えた三人の間に、世にも珍しい印にまつわる風流韻事がおこった。

それは桐陰蔵印中、江戸期の印聖・高芙蓉(一七二二〜一七八四)の刻した「滄浪」印が或る時、市島春城の手に贈られたことに起因する。これをききつけた五峰が、是が非でもこの「滄浪」印を入手したい旨を盟友

四

春城へ申し入れ、懇願の挙句春城が根負けをし、譲渡する運びとなった。この辺りの事情については、『五峰餘影』(P168以降)所収の春城自身のペン「五峰君の印癖」に読める。そこで春城がいうには、

折角のお望みだから差上げるが、私のために詩を作って貰いたい。その詩に就ては注文がある。それは此頃御覧に入れた三十数顆の鶏血石の印を題にして欲しい。且つ詩の趣向に就ても注文がある。私は前年新潟で咯血したことがあるが、此の多数の鶏血石を得て、失うた血を補うて余りありと言ふ意を詩中に寓して欲しいと言った。君(五峰のこと)は欣然之れを諾して面倒な注文だが、やって見ようと言はれた。……

と五峰に桐陰旧蔵「滄浪」印を渡す代わりに、鶏血石に由来する作詩をしてもらうことを交換条件として呈示したのだった。やがてこの約束に応えるべく、五峰は春濤の嗣子・森槐南や大久保湘南に相談しつつ、ようやく「鶏血石歌贈市島春城」をまとめたのだった。五峰詩中とくに庄巻と評されるもので、同詩を揮毫した一幅が『五峰餘影』冒頭口絵に用いられている。多字数の行書を謹厳にしたためた見応えのある大幅といえよう。その全文は『五峰遺稿』(下巻一・一丁)に収録されている。

興趣があるのはこの後で、印と詩とを無難作に交換することを拒んだ春城の発案で、東京向島に一席を設け、印人濱村蔵六・詩人大久保湘南を立会人として呼び、嫁入りの儀式ならぬ雅印の結納式を取り行ったのである。次いで今度は春城が五峰・湘南・蔵六そして寺崎広業画伯を招待し、返礼の雅会が催された。以上は当時、芸苑の一佳話としてもはやされたことである。

九、桐陰旧蔵五峰書軸

この高芙蓉刻印「滄浪」をめぐる春城と五峰との応酬に先んじて、実は五峰も桐陰から三顆の印を譲渡されていたのだった。それらは先代から三浦氏に伝わったもので桐陰が珍蔵していたのだが、円融具足の行為といふべきか、割愛する際に三顆の各印にわざわざ桐陰は詩を賦して五峰に渡す

という念の入れようであった。各々の印への愛着ぶりをよく示すこと
といえる。『北越詩話』(下巻・P 796)に、

桐陰、印癖あり。兼て鐵筆を善くす。法を濱村薇山に受く。家蔵印
數十顆。皆な先世の故物。亦た佳刻多し。予曾て之を觀て。饒涎三尺。
桐陰、三顆を割愛し。各々一詩を附して贈らる。一は高芙蓉刻。文に
曰く。鶴鳴于九臯。有似九臯鶴。聞天聲本清。憑君且珍重。不廢印人
名。

一は卷菱湖刻。文に曰く。風流罪過。風流罪過猶昨。文字因縁到今。
小技雕蟲大好。詩人畢竟情深。

一は濱村薇山刻。文に曰く。挾飛仙以遨遊。遨遊徑合挾飛仙。一瞬
浮生算百年。此物么麼取無禁。清風明月故依然。

右の記載が印文と、それに桐陰が付した詩文の内容である。つまり桐陰
は、芙蓉刻印に関して五峰と春城とに一印ずつ割愛していたことになる。

これを受け取った五峰は、『北越詩話』によれば「予乃ち七古一篇を賦
して謝と為す」とあり、五峰得意の作詩をもってこれを桐陰に贈ったのだっ
た。架蔵中、軸留に「五峰坂口君書 贈桐陰五古 桐陰草堂蔵」と墨書さ
れた五峰書軸があつて、内容から察するに雅印三顆の割愛に対する謝礼の
書軸そのものと推断する。

尚揮毫は落款より明治四十年(一九〇七)である。詩句に数文字の異同
があるものの、『五峰餘影』(中・三丁)に同文が「謝三浦桐陰贈印兼寄橘
蔵六 丁未」と題し収録されていることから、稿成ると同時に書かれたも
のであつた。

十、春城言辭より

では、五峰は如何にして篆刻に対して趣味を深めていったのか。道程を
解きほぐす資料を、市島春城の言辭に拾収することが出来るのだつた。主
にそれは『五峰餘影』に収録され、

○五峰に骨董趣味はなかつたが、ただ唯一、印材・用印には凝つて多く二
百近くの数を保有した。

○五峰に春城が自分の室名の命名とその揮毫を依頼したことがあり、それ
に対し五峰は「小精廬」と冠した。「小精」は小さな空間を楽しむ印を
愛玩する者ならではの用語で、春城は気に入つたのだつた。

ここにその全文を『五峰餘影』(P 157)より引用する。

小精廬記

市島春城卜居江戸川之南、第閣連簷有園池勝、獨愛向陽之一室、机
案卷冊與爐鼎錫列、讀書接客悉皆於此、曰是吾小精廬也、即屬余作
小精廬三字、且徵記、有客問曰、小精何義余應之曰、非小精之廬、
實精廬之小也、春城夙荷大隈侯知遇游其幕下三十年、能知侯之大而
非小也、今舍大而取小者蓋有深意存焉、已獲古印類百顆小印尤可珍、
儲磁杯幾百事皆小而無大者、乃言酒趣不在鯨飲、近者聚袖珍本、小
不盈寸、大亦不過三寸、自經史諸子至小說雜家、莫不盡備、収之巾
箱置于机席間、乃用小字冠精廬、蓋標其所好也、客曰、僕聞大兼小
之語、未聞小兼大、異哉春城之所好也、余曰春城之言小也、非謂小
大相兼也、春城之一巾箱已蔵袖珍二千餘種、尚恢乎有餘地、更蔵萬
種亦未可知也。前人有言蔵世界於一粟、佛法何其大、貯乾坤於一壺、
道法何其玄、春城之巾箱近之矣、然仙釋之言不足道也、余嘗聞之、
小者大之精也、春城其有得于此乎、大隈侯每事規其大而不能小、其
所不能者春城冥贊默補不遺餘力、侯倚重之、春城所以為小精可見其
一限矣、抑春城秉志貞固、好讀書、竊有所希圖、別為今日之小精者
一變為他日之大精者、其亦將有見之乎、客喜曰、唯々、乃次以為記、
只愧吾文之猶不精已。

○濱村蔵六と五峰と春城で置酒会談を重ねる中、春城の印趣味も他の二人
に影響を受け、いよいよ深まりをみせるに到つた。「君の遺印を調べて
見ると、十の六七は蔵六の手に成つていて殊に全部その傑作に数ふべき
ものである。」とも言っている(P 70)。

○先と重複するが。水原・三浦家歴代の当主は雅印を名家に刻させる趣味
をもち、桐陰の代に春城へ「滄浪」(高芙蓉刻・朱文印)を譲渡した。
その後桐陰旧蔵「滄浪」印は、春城から五峰の所有となる。ききつけた
五峰が春城に懇願して入手したわけである。その際、春城は印を渡す代

わりに材質の鶏血石に由来する作詩をしてもらうことを交換条件として呈示したのだが、東京向島に一席を設け雅印の結納式を取り行うまで凝った趣向であった。「鶏血石歌贈市島春城」詩は『五峰遺稿』にも収録している。『五峰餘影』には肉筆も挿図に用いられているが、所蔵者の春城の発願によるものと思われる。因みにこの「滄浪」印は五峰逝去後、形見の品として春城に戻された。やがて、富岡美術館の有に帰している。その富岡美術館蔵品も今日、早稲田大学へ寄贈され、平成十八年五月八日から六月三日まで早稲田大学會津八一記念博物館にて「富岡重憲コレクションの近代美術―絵画・書・工芸・印章―」と銘打ち特陳が行われた。幸い話題の芙蓉刻「滄浪」印も展覧に供され、筆者も実見が叶った。

五峰の遺骸を茶毘に付し遺骨を拾うと、歯牙を修理した一塊の黄金が見つけられた。坂口家では記念に永久にそれを佛壇に置くため、春城に取り扱いの趣向を窺った。故人の印癖にふさわしく鑄印を献策した春城は、濱村蔵六の刻した「長相思」白文印を型に黄金の鑄印を仕上げ、ついには記念録『五峰餘影』表紙に捺され、故人にふさわしい逸事として話題となった。

以上の内容は「追憶記」「五峰君の印癖」と題する春城著述にまとめられているもので、同癖者であるからこそその言といえよう。つまり春城は五峰の人柄の中でも、この印にまつわる話題を語り継ぐべきものと捉えていたわけである。

十一、春城の印癖と概容

さて、これからがもう一方の春城印癖についてである。

① 蔵印量の豊富さ

② 印にまつわる随筆・記述の多さ

よって、その腐心の度合が余人の及ばないものであったことを推察する。

随筆家春城の全業績を検索し得ないが、『市島春城随筆集』（全十一巻 クレス出版 H8刊）を試みに通覧すると、

第一巻『随筆頼山陽』所収「山陽印癖の追補」(T14刊)

第二巻『小精廬雜筆』所収「二顆の印」「印趣味の鼓吹」(S8刊)

第三巻『春城代醉録』所収「蔵書印の考察」「刀畔の印刻」(S8刊)

第七巻『擁炉漫筆』所収「郷男の印癖と松石山房」「名家私印の保存に就て」(S11刊)

第八巻『春城閑話』所収「印の趣味」(S11刊)

第十巻『余生児戯』所収「紅霞山房印話」「印話採余」(S14刊)

第十一巻『春城談叢』所収「名家私印の蒐集に就て」「醉印人」(S17刊)

さらに他に架蔵で見出したものに、

『春城隨筆』所収「印の趣味」(T15刊)

『隨筆春城六種』所収「印の結婚」(S2刊)

『春城筆語』所収「印人の習癖」「百道楽・印」(S3刊)

等がある。

まず春城は、『五峰餘影』所収「五峰君の印癖」で、五峰蔵印に触れつつ、

君はかつて自分が多方面の趣味家たるを知って「君のやうに種々のものに嗜好あるものもないものだ、この點については遙に企て及ばぬが、唯だ吾輩には印癖がある。これだけは君に譲らないつもりだ」といはれた。多年の知友たる自分は君と種々話し合ったことも多いがこれまで印のことだけはついぞ語ったことがないのに、このとき初めてこの點に觸れたのであった。そこで自分は案外に感じ「は、あ君に印癖があったのか」といひ出し「實は自分も印癖家だ」とかねて行蔵の印を出して君に示すと、今度は君が驚いて「こいつは全く恐れ入ったまさか君にこの道樂まであらうとは……」と互に呆れ合ったのが機會で、爾來兩人は印を通じて更に一層深交の間柄となった。

もち論自分は君を驚かすに十分な程多くの印を蔵してゐた。

と記す。文中の「君」が五峰、「自分」は春城のこと。「もち論自分は君を驚かすに十分な程多くの印を蔵してゐた」との一文は、とくに見逃せない。

一体どれ位を保有していたのであろうか。

新潟県立図書館には、四段の引出しを備えた専用の木製箱にまとまった

数が保存されている。縦47、横44・5、奥行38cmになる箱。各段に収められた印の場所はとくに整理されたものではないようにみえるが、平成十八年四月に私が実査した折には、一段目三十一、二段目四十二、三段目四十三、四段目三十、計一四六顆の印を確認した。これについては神野雄二氏「市島春城の印章」(上・下)、『修美』44・45号所収)に印影と側款等データをまとめたものがある。氏によれば、早大に相当量の雅印資料が移管されているという。

もう一ヶ所は、東京の富岡美術館に大量に伝世した。

この富岡美術館収蔵印は、これまでに一九八七年から九一年にかけて同館で開催した「市島春城の印章コレクション展」図録三冊がまずあって、のち『春城蔵印』(H14 青裳堂刊)に改めて集成公刊された。この本のあとがきによると、館蔵品は七四九顆で、うちわけは刻印六九三、吉田半迂分刻心経二十七、未刻印材二十九顆。十一箱に分収、うち八箱が春城所有時のものだという。同館閉館に当り、この蔵印は一括して早稲田大学の管轄するものとなった。以前新潟県立図書館にあった「郷土誌料春城文庫」(S30刊)の多くが、早大に移された因縁によることと察せられる。

十二、富岡美術館「春城蔵印」にみる越人資料

『春城蔵印』(青裳堂刊)を巻頭から検し、気がついた越人関係のものを摘出してみる。

P 8 「鶴鳴于九臯」(高芙蓉刻) これは側款により水原の三浦桐陰旧蔵であったことが判る。それが五峰に贈られ、五峰没後、春城の有に帰した。五峰が当時入手した様子を、「印にかけては往々猛烈な執着ぶりを示したものであった。動もすると人の秘蔵品を殆ど強奪して行ったりするほどで……」(五峰君の印癖)と記される程だったが、「五峰君逝去の後阪口家から私に記念物を贈らると言ふから、私より無心を言うて数顆の印を申受けた。其内には問題の芙蓉の二顆の印もあり、私が割愛した二三の印もあって皆旧主に戻り、今は大切に記念物として珍藏してゐる。」(同文)と経緯

が書き留められている。ちなみに側款には、「五峯先生近有印癖余乃贈所蔵印三枚贈以詩各一章／用五六七言体三浦春」側款「五峯詞宗／贈以一詩既政／桐陰三浦春／初艸／余客秋遊于越／之舟江觀此印／於閒放樓今婦／五峯詞宗 印聖手刻／吾家旧物／今贈 有似九臯／鶴聞天声／本清憑君／且珍重不／滅印人名／高芙蓉所刻／文曰鶴鳴于九／臯丁未四月初吉／勒于墨東蔵／六居濱卯裕」とある(／は改行を示す。以下略)。

P 9 「滄浪」(伝高芙蓉刻) これも三浦桐陰旧蔵で、重ねて述べるが春城に譲渡後、五峰に割愛するにいたっては墨堤で印の結納式と称する濱村蔵六・寺崎廣業を呼び筵席を開いた珍品。前印と同じく五峰没後春城に戻った。側款なし。

P 15 「市島克一」(子協)(前川虚舟刻) 春城一族の市島子協自用印。

P 24 「吳俊長印」(益田遇所刻) これは吳雪槎、すなわち五十嵐雪槎自用印。新瀉きつての古い画人・五十嵐俊明の一族。刻者遇所(一七九七〜一八六〇)は江戸の印人・益田勤齋の養子。

P 25 「雪槎子」(益田遇所刻) これも五十嵐雪槎自用印。側款「癸丑中春刻贈雪槎老兄遇所」、嘉永六年(一八五三)刻。

P 29 「板倉勝明」(吳北渚刻) 刻者は五十嵐俊明一族。側款「乙未竹醉日」で、天保六年(一八三五)刻印。

P 30 「子赫氏」(吳北渚刻) 前印と一対をなす。

P 31 「東坊城蔵書記」(菅原聡長之章)(吳北渚刻)

P 40 「三浦東作」(四世・濱村蔵六刻) 東作は三浦桐陰の父・鳩邨。

P 41 「三浦端印」(四世・蔵六刻) 前印と同じ人物の旧蔵一対をなす。側款「丙寅秋日橋解法古」、慶応二年(一八六六)刻。

P 42 「平春作氏」(四世・蔵六刻) 三浦桐陰自用印。

P 43 「平春之印」(四世・蔵六刻) 同右。側款「丁卯如月於鎮翠館解法古」、慶応三年刻印。前印と一対をなす。「橋」は蔵六の本姓、「解」は字(大解)。

P 45 「煉心窟」(益田香遠刻) 水原出身の琳派画人・池田孤邨自用印。刻者香遠(一八三六〜一九二二)は前出・益田遇所の子。

P 46 「旧松道人」(益田香遠刻) 孤邨自用印で側款「甲子初春 香遠篆」、元治元年(一八六四)刻。前印と一対。

- P 65 「長家山水国」(五世・濱村蔵六刻) 阪口五峰自用印。側款「長家山水国擬漢鑄印法裕」、明治四十一年(一九〇八)刻。裕は蔵六の名。
- P 66 「阪口恭寿農」(五世・蔵六刻) 前印と一对。側款「戊申五月初吉篆于陶冶雕虫窟 五峰先生正 蔵六裕」、明治四十一年刻。
- P 67 連珠印「恭印」「五峰」(五世・蔵六刻) 阪口五峰自用印。
- P 68 連珠印「三浦春印」「開放楼」(五世・蔵六刻) 三浦桐陰自用印。桐陰の名は宗春。開放楼は居宅名。
- P 69 「桐陰詩書」(五世・蔵六刻) 三浦桐陰自用印。
- P 80 「風流罪過」(五世・蔵六刻) 桐陰自用印。側款に「詞人畢意情深卷菱湖所刻文曰 風流罪過猶昨文字因縁到今小技雕虫也好 風流罪過以贈五峰詩宗并政桐陰三浦春初艸 蔵六裕刻」とあることから、かつて桐陰が五峰に贈ったものをのちに春城が入手した印と判る。
- P 84 「三浦春」(岡本椿所刻) 桐陰自用印。
- P 85 「拙孝」(同右) 前印と一对をなす。
- P 94 「伯行之印」(徐三庚刻) 新潟出身の南画家、大倉雨邨(一八四五～一八九九)自用印。側款に「上虞徐三庚刻贈雨邨仁兄清賞 壬申七月同客滬上」、明治五年(一八七二)刻。当時としては珍しく雨邨は渡清経験をもつ。徐三庚(一八二六～一八九〇)は浙江省の人。書と篆刻に一家をなした。
- P 95 「顧言」(徐三庚刻) 大倉雨邨自用印。前印と対。なお雨邨は大言壯語放言癖があったといわれ、印文と甚だつり合って興味深い。
- P 116 「任」巻菱湖の字・大任の一字を刻したもの。
- P 117 「菱湖居士」同じく菱湖自用印。新発田市五十公野に市島一族墓碑林立し、中に菱湖書碑があり、両者は接点があったのだろう。
- P 118 「伯弘」新発田の儒者・丹羽思亭(一八四六年・五十二歳没)の字を刻したもの。箱書「幕府侍医辻元松庵遺印 新発田藩儒丹羽伯弘遺印 島津圭齋刻 共竹根」。刻者島津氏も新発田の人。素封家・医家。
- P 124 「池田氏」側款「醉茗刻」。
- P 125 「孤邨」
- P 126 「藤原三信」
- P 127 「三信印」
- P 128 「三信」
- P 129 「三信信印」
- P 130 「蓮盒」
- P 131 「蓮盒」
- P 132 「煉心窟」「三信鑑」両面印
- P 133 「煉心窟」
- P 134 「茶画三昧」
- P 135 「茶画三昧庵主」側款「時壽戊至前 為孤邨画伯清玩 代大黒主人六十四老人醉茗阮交」。嘉永三年(一八五〇)刻。
- P 136 「三信過眼」P 124より全て池田孤邨自用印。「三信」はその字。茶をよくし、文物を愛蔵した個性をしのぶ。刻者醉茗不詳。一つに制作年あり。
- P 150 「柳東政章」日柳燕石自用印。讃岐の人。義侠人で、戊辰の役に際し西軍に従い進行。本県柏崎で死す。
- P 151 「燕石之印」同右。
- P 164 「白眼居士鴻爪子」益田香遠刻。側款「小心落墨大胆奏刀 明治十九年丙戌春三月於鳥歌松梵精舎 香道人厚」
- P 165 「劍峰有路鉄壁無門」(益田香遠刻) 側款「以古為幹以法 為根以心為造 以理為程 丙戌春日鑄於浄碧居所窓之下 香遠厚」。前印ともに上越出身の通信功労者・前島密自用印。巨刻。明治十九年(一八八六)刻。
- P 171 「大倉行印」(成瀬石癡刻) 側款「丙子孟夏 石癡米篆」。
- P 172 「鉄農」(成瀬石癡刻) 側款「丙子孟夏 石癡米篆」。前印ともに新潟生の南画家・大倉雨邨自用印。明治九年(一八七六)刻。
- P 186 「開放楼」三浦桐陰自用印。
- P 202 「双魚」以下市島春城自用印。側款「笛波奏刀」。
- P 203 「春城子」(永坂石埭刻) 側款「己酉四月為五峰兄刻小印春城先生見而愛之出此石索刀因作此以応之余学篆日浅工拙未遑計也 石埭老人周并記」
- P 204 「坐中佳士」(山本拜石刻)「丁未八月上浣八日午睡起清甚憶起 春城市島先生属作此正篆 七十八老生拜石過」。
- P 205 「余情兒戲」

- P 206 「余情児戯」側款「坎齋作甲子十二月」。大正十三年（一九二四）作。
- P 207 「紅霞山房」（吉田半迂刻）側款「田半迂作」。
- P 208 「五峰」「廣業」「象」（象形印）「春城」「湘南」（吉田半迂刻）五面印。阪口五峰・寺崎廣業・濱村蔵六・春城・大久保湘南自用印。湘南は佐渡生の詩人（明治四十一年・四十四歳没）。墨田川周辺に「随鷗吟社」を興し、春城から五峰へ「滄浪」印結婚式が行われた際にも立ち合った。
- P 209 「春城過眼」（吉田半迂刻）側款「田半迂奏刀」。
- P 210 「双魚堂」
- P 211 「小聖」半迂刻。側款「丁未夏日田迂」。明治四十年（一九六五）刻。
- P 212 「師古」側款「芳雨作」。箱書「麒麟鈕銅印 文云師古 大正乙卯初夏市川雅兄清滄芳雨作 市川芳雄寄贈移增春城先生書文 秋艸道人」。春城自筆篆書を刻させた珍品である旨を會津八一が認めている。
- P 213 十二支肖形印（吉田半迂刻）側款「半迂撫古」。
- P 214 「読史不可无酒談禪不可無美人」（吉田半迂刻）側款「戊申嘉月之吉半迂」。明治四十一年（一九〇八）刻。
- P 215 「万里江山鴻爪偏一天風月馬蹄寬」（吉田半迂刻）側款「万里紅山鴻爪偏一天風月馬蹄寬 袖海先生篆法半迂拜摹于時大正三年二月十一日也」。大正三年（一九一四年）刻。
- P 216 「馬琴翁六十年忌辰会」（吉田半迂刻）
- P 217 「曲亭」「馬琴」両面刻（吉田半迂刻）
- P 218 「孔子孔子大哉孔子孔子以前既无孔子孔子以後更无孔子孔子孔子大哉孔子」（吉田半迂刻）
- P 219 「卯」肖形印（吉田半迂刻）側款「乙卯正月五日作田迂」。大正四年（一九一五）刻。
- P 220 「吉羊」肖形印（吉田半迂刻）側款「田迂」。
- P 221 「いろは…ゑゐもせず」（吉田半迂刻）側款「田迂戲作」。
- P 222 「黄金本」六面印（吉田半迂刻）

十三、通覽して

主に巻菱湖二、丹羽思亭二、池田孤邨十五、日柳燕石二 大倉雨邨四、三浦桐陰十一、前島密二、阪口五峰三、春城自用印十九顆、側款によって印の来歴が明らかになるものを含み、コレクション形成の経緯を分析する手懸りとなる。一々春城との関係も調べたいが、まずはこのように本県ゆかりの遺物を資料として整理した次第である。『紅霞山房印話』によると、春城自身が交流をもった印人は山本拝石・中井敬所・濱村蔵六・圓山大迂・桑名鉄城・中村蘭台・蛙巢・山田寒山・河井仙廬・楠瀬日年・服部畊石そして山田正平等の名がみえる。「此内故人で最も親しく交つたものは蔵六であったが早く歿した」といい、自用印の刻者では吉田半迂のものが上記の他、新潟県立図書館蔵品中にもたくさん含まれている。半迂は京の印人・圓山大迂門下で、早大図書館に春城がやとつた人物。「自分が若し印刀を握れば試むべきことを皆此人にやらせた」と春城がいう程、さまざまな刻印依頼をし、数百顆に上つたという。半迂の経歴は、この春城記録以外には殆ど残っていないであろう。

また「名家私印の蒐集に就て」（『春城談叢』所収・P 87）には、自分の架蔵にある諸名家の私印はどれほどあるか、曾て委しく調べたこともないが、多分五百顆位あるであらうと思ふ。一家に就て僅かに一顆だけのものもあるが、多いの是一家で数十顆に及ぶものもある。勿論中には遊印も若干交っているが、大略は私印である。

今左に数の多い諸家を挙げると、

川路聖謨	十六顆	池田孤邨	三十四顆	林鶯溪	十三顆
浅野棟堂	四十五顆	高橋泥舟	十三顆	西嶋青浦	十八顆
中井敬儀	十顆	高嵩谷	十二顆	細井九臯	十顆
重野安釋	十二顆	計百八十三顆			

を紹介。続いて五十七家の分に、

巻菱湖	石印四	水晶一	丹羽伯弘	竹根印	吳雪槎	石印
大倉雨邨	石印徐三庚刻		阪口五峰	石印敬所、蔵六刻		日柳燕

石 石印 三浦鳩村 二 三浦桐陰 二 前島鴻爪
 といった越後関係がやはり含まれていた。

十四、雅印婚礼の儀

新潟県立図書館に保有される春城蔵印の一塊も詳しく調査すべきで、同館には文中度々言及した高芙蓉刻印「滄浪」を墨田川沿いで春城から五峰へ譲渡した際、その場で揮毫したと思われる「五峰山人鷄血石歌」(一卷・春城題)が関連資料として現存する。

場所は枕橋の八百松。一種の婚礼といふべきものと目し、媒酌人に詩の方面の立会人は大久保湘南、印の方は濱村蔵六に出席を依頼。当日先ず立会人の湘南が得意とする吟声によって朗々と五峰詩長篇「鷄血石歌」を三誦、その声は水面に響きわたり余音長く、一座に詩味を漲らせる効果があった。流石にこの五峰詩草稿に手を入れた人らしく、長詩を全文暗誦しての行為だった。

続いて今度は春城が一席演説を開き、この「滄浪」印は自分の愛児だが既に阪口家に姉妹たる「鶴鳴于九阜」印があるから、この児も共に阪口家で養われるのがその身の幸福であろう。自分は嫁入支度の余裕がなく着のみ着のままというよりも、この通り赤裸々であるのを恥じ入る次第、と趣旨を述べ、こうして四氏盛んに盃を挙げ痛飲を快くしたのだった。

念の入れようで、後日今度は春城が返礼の会を設け先の諸氏を招待したのである。場所は赤坂の三河屋で、立会人に寺崎廣業にも案内をした。席上、五峰は縦幅に「鷄血石歌」を揮毫、これが『五峰餘影』口絵にあるもの。別に双幅とすべく、そちらには廣業が蒼古な蘭及び高い卓上に香炉、卓下に鷄血石を配した。その香炉に蔵六が印人らしく篆書を付す。湘南は一詩を書くことになっていたが、不幸にも天然痘を罹って当日欠席となった。

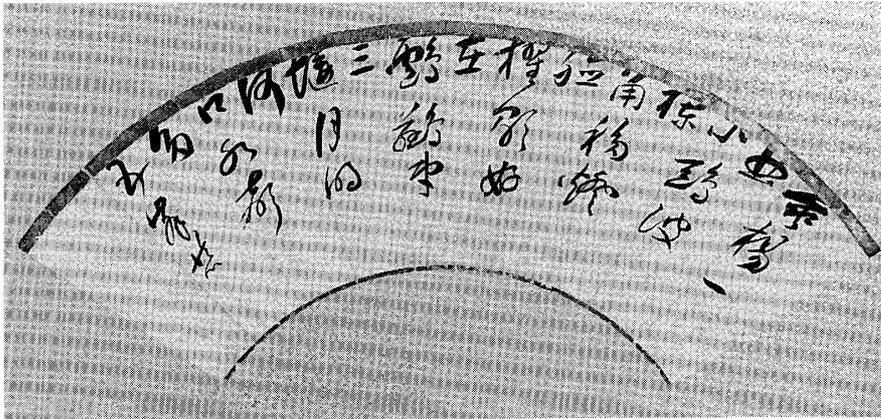
その後、五峰を介して湘南の代役として永坂石球に依頼して三河屋席上合作に一詩を題してもらったのだが、石球の揮毫までに湘南急逝、続き、蔵六までもが同病で没してしまい、石球の詩は両氏に弔意を示すものとなっ

た。

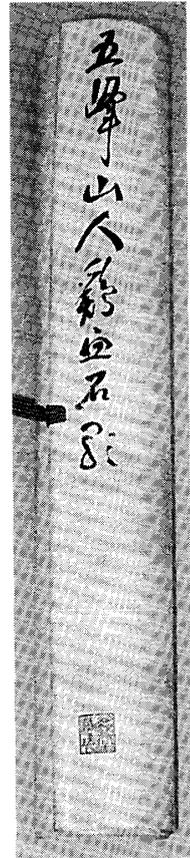
以上五峰詩縦幅と五峰・廣業・蔵六・石球合作を併せて双幅とし、春城は家珍と定めた。この印と詩の交換を記録した春城のペンが「五峰君の印癖」と「印の結婚」(『随筆春城六種』所収)に読み取れる。一部異同あり、前書は場所を植半、後書は八百松とするなど。実は県立図書館の分は廣業と蔵六の書画が文中紹介したものと同じではない。春城の二文も文章に不明の箇所があるのだが、前書に「席上君は筆を揮って鷄血石歌を一幅に書き更に横巻にも揮毫された」、後書に「巻物一卷にも筆を染めたが、掛物の方は対幅とする為め立会人諸君が別に合作の筆を執るといふ訳で……」とある。つまり、県立図書館巻子本はこの春城が開いた返礼の宴の席上、双幅と別に成ったものとみられ、二書へ載る内容とは若干異なる。まず廣業が水墨で白梅を描くが、紙辺の上部から垂れ下がる枝振りを構図上巧みにし、下方に淡彩にて蔵六が瓦当文「延壽萬歳」と篆書を配す。続いて五峰が「鷄血石歌」と題し、

春城先生有印癖 龍文鳳篆苦搜索 玩物自此襄陽顛 博古將奪松雪席
 少時論事忤當塗 雄文買禍闢鷄檄 時艱蒿目三十年 一腔熱血空鬱積
 久之遂致長吉嘔 赤醬迸地眞可惜 天上將成白玉樓 人間難求丹砂液
 有人來賣鷄血紅 昌化所產其鈕百 方圓大小各態殊 或戴花冠或赤幘
 綠字鮮疑繡頸回 紅文勁見金距磔 就中一塊如峻山 山皴隱見絡紅脈
 先生獲此疾霍然 摩挲日夕手不釋 紅霞滿室光態々 邀吾誇示連城壁
 自謂曩時嘔出三斗血 滲入石膚如許赤 寸心耿耿某在斯 歷遭塵劫長不易
 吾謂先生莫乃丈人頑 雕肝斲肺亦何益 胸中磊塊今有無 聞鷄起舞憶曩昔
 不願磨崖刻姓名 唯願先生壽猶石 五峰樵者 恭初草

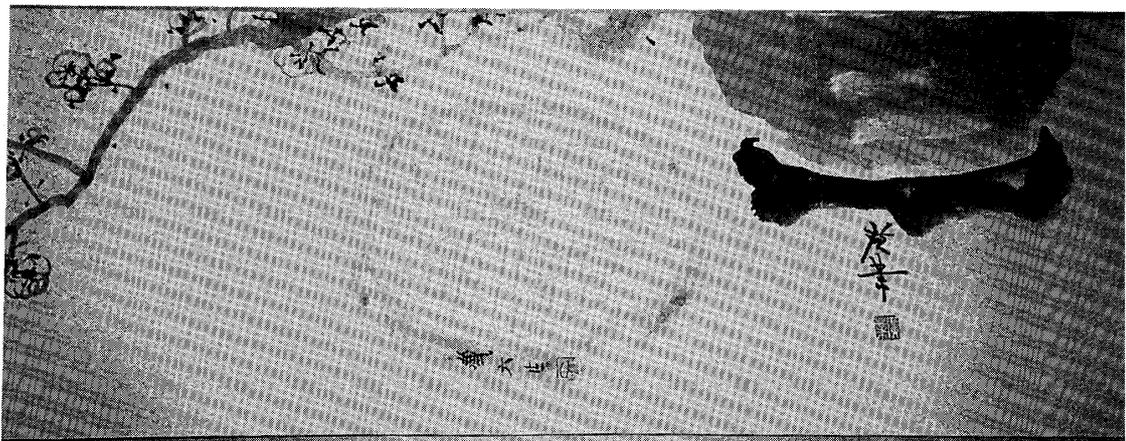
春城はこの二十数年前に郷里にて咯血をし、代わりにまとまった量の好質の鷄血石材を得たことにより、以前失った血を償って余りある佳品と賞した作詩を五峰に依頼した内容になっている。



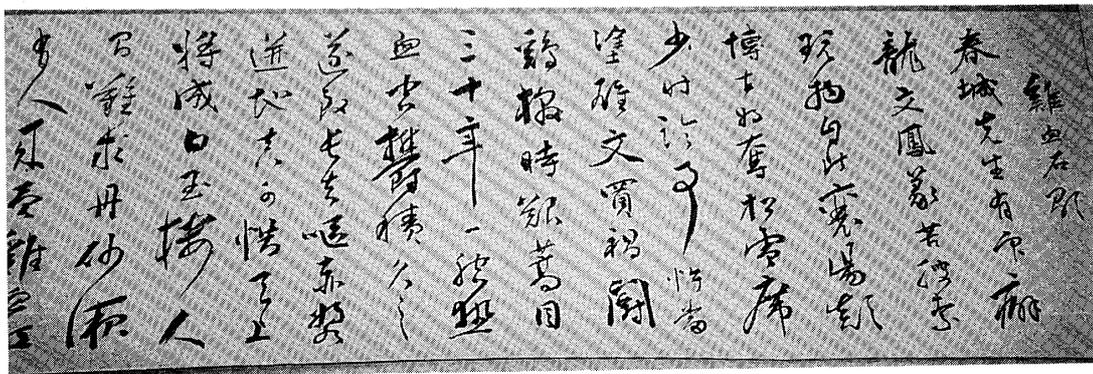
参考品 五峰遺墨



卷子「五峰山人鷄血石歌」(春城題)



寺崎廣業・濱村藏六筆部分



五峰書部分

十五、大久保湘南

序ながら、立会人の中で廣業と蔵六は略歴を知られるが、あと一人湘南には目ぼしいものがなく、ここに若干書き留めたい。

名は達。字は雋吉。湘南はその号。佐渡の人。詩をもって名を著し、随鷗吟社を創す。明治四十一年二月九日病没。享年四十三。日暮里の本行寺に葬る。子無く、ただ詩巻を天地に留む。没年のとし六月、吟社友相い謀つて墓石を建つ。森槐南が撰文し、永坂石棟が書いたものである。

五峰の鷗鷺会に参加した加治村の長澤松雨が遺稿より選定刊行した『湘南詩鈔』(S13刊)には、春城が序文を寄せているので全文を掲げる。

大久保達 湘南。と号す。佐渡の人。幼にして詩を能くす。人目して天才兒と為す。郷友長澤松雨君。湘南と刎頸の交あり。湘南の飄零函館にあるや其才を惜んで。債を贖ひ帝都に延き。森槐南に学ばしむ。後師と謀つて随鷗吟社を創立し星社の為め大いに気を吐く。湘南の詩名再後大いに揚る。余詩を解せずと雖も亡友阪口五峰の居に数々湘南と会し。時に相携へて酒樓に欸晤或は夜を徹するに至る。湘南人と為り温藉恬淡。容貌秀麗酔へば必ず朗朗詩を吟す。吟詩は其得意とする所なりし。湘南艷体の詩を喜び巧みに綺語を弄す。夙に以為らく錦心繡腸。咳唾珠璣の語は湘南にして初めて許さるべき者なりと。嘗て戯れに卑野の俗語四五を挙げて湘南に雅化を需む。湘南咄嗟佳語を以て応ず。余深く其才藻に服す。

五峰余の為に鶏血石歌の長篇を作る時推敲一句。湘南と商量して成る。実に五峰集中の傑作なり。詩成るの日。余五峰に招かれ墨堤某旗亭に会す。湘南并に印人濱村蔵六席に在り。湘南得意の美声を発して五峰の詩を三唱す。余湘南に一詩を請ふ。諾して数日の後を約す。其数日の後は余が五峰に対する答礼の為め赤坂の某亭に開宴の日なり。五峰蔵六寺崎廣業来り会して湘南独り来らず。凶らざりき湘南は令妹の病を訪ふて悪疫に感染し。二三日を経て其計を聞かんとは。余此事を憶ふ毎に。胸塞り腸断つの感なきを得ず。湘南春秋頗る富むの身を

以つて早世し。詩壇に一才人を失ふ洵に惜むべし。屈指すれば既に四十年に垂んとす。長澤君旧誼を忘れず。永坂石棟の遺志により。遺稿を検して自ら好む所の佳詩数百首を選び近く刊行世に問はんとして序を余に徴す。乃ち追憶の記を草して序に易ふ。昭和十二年丁亥十一月

市嶋春城七十八叟

才華力量を有し急逝した詩人を尚友する春城の言辭には、やはり印と詩との交換の雅筵を忘れ難き佳話として綴る。なお筆者蔵本『湘南詩鈔』の欄外には、「湘南子ノ令妹ハ花房右恒ノ夫人ナリ 順天堂入院中見舞ニ来リ隣室ニ痘患者アリ 之ニ罹染シ痘瘡ニテ薨ル」と、この本を贈られた小塚春甫の鉛筆書入れがあり、湘南死の真相を一層窺える。本の贈り主が花房右恒。短文ながら舟江詩人を剖判する際の一助として上述する。

十六、結論

八十五歳の長寿を全うし、幅広い人脈を有してそれに伴い、活動の舞台や趣味は相当多彩であった春城が、これ程までに印のとりこになったのは何故だろうか。この点、「元来自分もこの趣味は有してゐたといふものゝ君と交はるまで餘り印人との交渉がなかったのに幾許もなくしてこれと交際の端を發したのは偏に君の紹介によるのでそのころ君の最も交情深かった印人は歿した濱村蔵六であった」(五峰君の印癖)と、春城は五峰のことを回顧しつつ述べる。こうした五峰・蔵六との関係で、その印癖は一層深まりを呈するようになり、このような理由から拙稿の冒頭、まず五峰の印趣味の概略に触れたわけである。

最後に、春城の事蹟は広汎かつややもすると上京中のものが大半なため、私などは県人との接点をこれまで余り知らない。一口にいつて、「早稲田の春城」が先の四月の企画により、新潟県の、しかも生家水原(現阿賀野市)の人に久方ぶりに意識される契機となつたに違いない。そうして、県人の手によつて春城の事蹟分析・顕彰が少しずつ進展すれば幸いである。

実際展示内容には、印譜・自用印が多く並び、春城の宏荘な趣味中の位置付けも確かにはかられた。

共に北越の名立たる旧族に生まれつつ、今日その豪家の面影は両家とも土地に見出し難い。だが旧藏品は所を変え伝世、文筆家でもあった五峰・春城はとりわけ印にまつわる記述を多く残し、遺品を鑑賞する術となろう。冒頭政財界の人名を頻繁に呈示した感があるが、それらが全て地方文化の担い手でもあった面は注視される機が乏しい。例えば二十代の五峰と初期より詩の行動を共にした山際柳隄も、地方にあっては驚倒する質量の印章を保有、清人名家の刻印が少なくない。この傾向も五峰の存在を絡ませてみれば、理解出来る趣味である。方寸の世界を土俵とする篆刻ながら、五峰から春城と印癖の系譜を迎れば、談泉が湧き出でて尽きない。先述の県立図書館に収まった「五峰山人鶏血石歌」卷子本は、縦28、横510cmに及ぶ長巻で、これをくり延べて一人しばしば名印の婚姻式の有様を想起し同席者の精神面での昂りを感じ得、改めて本県が五峰・春城両文士を輩出したことを誇らしく思ったのだった。

十七、附

資料として「市島春城印選 小精廬印選」(原鈴・吉田文庫蔵)の内容を掲出する。「一、刻者」「二、文字」「三、側款」「四、印材」につき墨書付記されており、冒頭より順番通り列する。

- ①中井敬所
得其人傳不必子孫
七十八叟 敬所
石 朱文
- ②中村蘭台
雙魚齋
石 朱文
- ③濱村蔵六
春城清玩
- ④濱村蔵六
紅霞山房
戊申正月 藏六袞
石 朱文
- ⑤濱村蔵六
世短意常多
袞作
石 白文
- ⑥濱村蔵六
越國世家
石 白文
- ⑦濱村蔵六
雙魚堂書畫記
袞擬古鉢
石 朱文
- ⑧濱村蔵六
雙魚堂珍賞
石 白文
- ⑨濱村蔵六
子孫易酒亦可
丁未七月初吉蔵六為春城先生法家製
石(両面) 白・朱文
- ⑩濱村蔵六
雙魚堂
鑄印 朱文
- ⑪楠瀬日年
草々不工
石 朱文
- ⑫楠瀬日年

天許作聞人
石 朱文

⑬ 楠瀬日年

小精廬藏古

吳苦鐵先生之法 後學日年作 時于昭和七年仲秋

石 朱文

⑭ 楠瀬日年

任逸不羈

日年仿漢

石 白文印

⑮ 楠瀬日年

詞場放浪

坎齋作 昭和四年明治節

石 白文

⑯ 楠瀬日年

小精廬秘笈

石 白文

⑰ 楠瀬日年

玩物聊自適

仿封泥 坎齋庚午臘月

石 朱文

⑱ 楠瀬日年

放言居

坎齋學ニ金蝶堂

石 白文

⑲ 楠瀬日年

寬放自然

石 朱文

⑳ 楠瀬日年

壽藏

石 白文

⑳ 石川蘭八

春城

石 朱文

㉑ 石川蘭八

疎懶窠

石 朱文

㉒ 石川蘭八

僕野人也

石 朱文

㉓ 石川蘭八

小精廬圖書記

石 朱文

㉔ 石川蘭八

春城閑人

己未六月作 于田廬 蘭八

石 朱文

㉕ 石川蘭八

小精廬主

石 白文

㉖ 山田正平

小精廬金石

石 朱文

㉗ 山田正平

小精廬

石 朱文

㉘ 山田正平

春城秘笈

石 朱文

㉙ 山田正平

紙短情長

石 朱文

③① 山田正平

小精廬生

石 朱文

③② 山田正平

春城居士

石 白文

③③ 山田正平

癸亥災後所得

石 朱文

③④ 服部耕石

家在牛籠五家坂

木 白文

③⑤ 服部耕石

春城七十以後所作

昭和庚午二月念七日 春雪霏々呵刀作此印以請春城先生教正 耕石篆人

要

③⑥ 服部耕石

此書不換酒

春城先生清鑒 大正甲子冬 耕石刀

③⑦ 磯野蛙巢

圖書金石癖

石 白文

③⑧ 磯野蛙巢

無用之用

石 朱文

③⑨ 木村翠陰

雲是吾師

石 白文

④① 木村翠陰

小精廬金石

石 朱文

④① 北川蝠亭

白雲紅日

陶印 朱文

④② 足立疇郎

小精廬

石 朱文

④③ 高橋樞堂

石 朱文

④④ 山口黃鐵

春城學人

④⑤ 吉田半迂

春城十年精力所聚

④⑥ 吉田半迂

春城過眼 雙魚堂清玩

石(両面) 朱文

④⑦ 吉田半迂

紅霞山房

石 白文

④⑧ 吉田半迂

幹墨結縁

石 白文

④⑨ 吉田半迂

雙魚堂生

石 朱文

⑤① 吉田半迂

春城 紅霞満堂
木(六面印の内) 朱文・白文

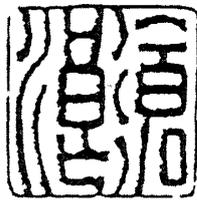
⑤山田寒山・山田正平刻

春城居士(白文) 小精廬主(朱文) 小精廬金石(朱文) 小精廬
(朱文) 市島謙印(白文) 鶉涯(白文)
各々材質と刻者の区別を明記せず。

〈末筆ながら、新潟県立図書館・吉田文庫、他資料を賜った方々に厚くお
礼申し上げます〉



四世濱村蔵六刻
「三浦春印」



高芙蓉刻
「滄浪」



巻菱湖刻
「風流罪過」
「鳩拙老人」



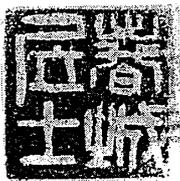
高芙蓉刻
「鶴鳴于九臯」

三浦家伝世印(原寸)

市島春城印選 小精廬印選 より (原寸)



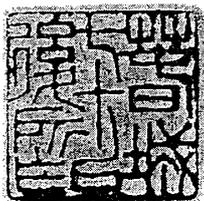
31



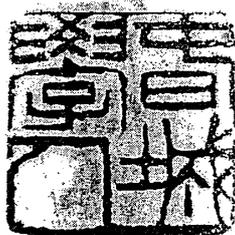
32



33



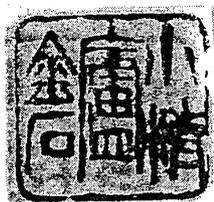
35



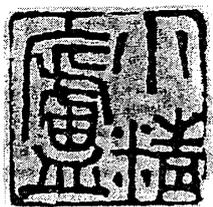
44



26



27



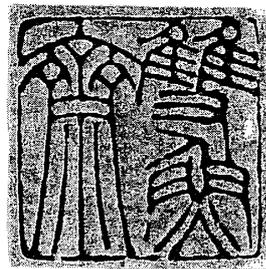
28



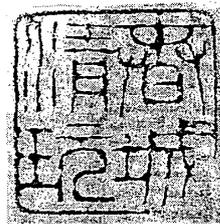
29



30



2



3



8



9



13



21